

「第7回定期総会」開催される

平成14年5月25日(土)東京都文京区の東京大学山上会館に於いて、第7回気象予報士会定期総会が開催された。東京大学は五月祭のさなか、定期総会に先立ち、近藤洋輝氏(前気象庁気象研究所気候研究部長、現(財)気象業務支援センター専任講師)により記念講演「気候予測における新たな展望～力学的モデルの役割～」が行われた。気温の上昇や激しい対流現象は地球温暖化の影響だと言われて久しいが、地球環境の変動を数値予報として捕らえようとする最先端の気候に関する問題を解説してくださった。

昨年に引き続き、定期総会会場に隣接する会議室を使い支部活動PRコーナーが設けられた。地方活動が活発な昨今、全国の会員が集うこの総会の場で、活動の様子を紹介した資料を眺めながら、情報交換がなされた。栃木県気象予報士会、東京支部、関西気象予報士会、四国支部が、最近の例会や検討会などの活動を中心に展示、紹介を行った。

午後1時30分から、岩間杏子さん(気象予報士会事務センター)の司会により、第7回気象予報士会定期総会が執り行われた。詳細は、会長挨拶、第7回定期総会議事録などをご参照いただきたい。

まず、木村龍治会長の挨拶に始まり、次に来賓の横手嘉二氏(気象庁総務部産業気象課課長補佐)より、気象予報士制度に関する動向にも触れた興味深いご挨拶を頂いた。続いて行われた総会は、会員数1,753名、総会成立定足数439名(全会員数の4分の1)、出席者105名(開始時)+委任状790名=計895名により成立し、議長:高橋利昭会員、副議長:高崎和彦会員の議事進行により執り行われた。議案書第1号議案から第6号議案(平成13年度の事業報告、会計報告、平成14年度の事業計画案、予算案、会則改正案、役員案)が審議・承認された。4時間近くにはわたって活発な議論が行われ、質疑が飛び交った。反対・保留票もあったものの地方支部運営細則も可決され、これからの地方支

部の運営の指針になっていくことと思われる。また、会長は3期務められた木村龍治氏から石井和子氏に替わり、気象予報士会として新たな方向への舵取りを目指していく。

総会の最後に、議案とは別に「気象予報士会の今後を考える委員会」からの中間報告がなされた。新たな気象予報士会のあり方と発展の方向を会員一人一人が自らの問題として捉えていきたい。

総会終了後には例年どおり賑やかな懇親会が催され、普段は遠く離れた会員同士の親睦交流も深まった。来年も皆様にまたお会いできることを楽しみにするとともに、会員の皆様のご協力に深く感謝いたします。

(上妻美妙恵 会報担当幹事)



佐藤前幹事の会計報告を真剣に聴く出席者

新体制への期待

- 木村龍治前会長挨拶

第7回定期総会のために、ご多忙のところ、お集まりいただき、どうもありがとうございます。特に、旅費を使って遠路より参加された会員の方々にお礼を申し上げます。また、土曜日にもかかわらず、気象庁からご来賓として参加していただきました横井様と板東様に感謝いたします。

設立当時を振り返って さて、私の手元に、平成8年7月に開催された設立総会の議事録があります。これを見ますと、入会希望者は729名。そのときの事業計画として、1) 会報・名簿の発行、2) 講演会・研究会の開催、3) パソコンフォーラムの運営の3項目が挙げられています。それから、6年経過いたしました。設立時には、予報士会の将来が見えていたわけではありませんが、振り返って見ますと、この3項目に関しては、ともかくも実現いたしました。しかし、この6年間で、会員が1000名近く増加したことは、当時は、予想できませんでした。

組織が大きくなると、組織の中に個人が埋もれて、人と人との個人的な連繋が難しくなりがちです。しかし、予報士会は、予報士どうしの連繋によって成立する会ですから、組織が大きくなっても、予報士の個人が見える会であるべきです。それを可能にするひとつの方法は、地方支部の活動です。

地方支部のあり方 幸いにして、この6年間、地方支部が次々に設立され、気象予報士会が全国的なネットワークに発展したことは、大変喜ばしいことです。しかし、支部の活動と予報士会全体の活動との関係は、必ずしも、明確ではありません。支部の会員の自由な発想で個性的な支部活動を行うことは、予報士会の発展から見て望ましいことではありますが、一方では、支部どうしの連繋や予報士会全体の予算で支部活動をサポートすることを考えると、支部がある程度統一した組織体制になっていることが必要です。この2つは、矛盾する関係にあるのですが、バランスを取った支部組織の構築が必要です。本総会の議案に、地方支部運営細則があがっておりますが、この点を視野に入れて、検討していただければ幸いです。

予報士会の性格 会員がこれだけ増加すると、予報士会の性格が、新しく資格を取られた予報士が気象予報士会に入会するかどうか判断する際の重要な条件になります。気象学会であれば、「気象学の研究」という趣旨がはっきりしているので、入会する人とならない人の仕分けがはっきりしています。これに対して、予報士会の性格を一言でいうのは、やや難しいのです。例えていえば、気象学会と予報士会の違いは、鉱物と岩石の違いのような気がします。鉱物とは、物質が均一な構造をしているものです。これに対して、岩石は多くの微細な鉱物が散りばめられた複合的な構造をしています。例えば、花崗岩は、石英、長石、黒雲母の微細な結晶が集まってできており、その配合によって、微妙に色合いが異なっています。この意味で、岩石の構造は、鉱物の構造より複雑なのです。そして、この複雑性が岩石の個性を決めているのです。私は、予報士会は本質的に岩石のようなものではないか、と思っております。それは、気象と社会の関係が多面的だからです。それに対応する予報士会が多面的になるのは必然のような気がします。

多面的であれば顔が見えなくなる、というものではありません。

岩石はよい手本であって、構造が著しく不均一であっても、岩石の個性ははっきりしています。それと同じように、予報士会の性格も、はっきり示すことができると思います。会が小さい間は、性格をあいまいにしたまま会を運営することができましたが、これだけ組織が大きくなると、予報士会の性格を「定義する」ことが必要です。性格的には岩石であるが、組織としては、岩石のように硬直化しない、柔軟な組織構造をもつことが望まれます。このことは幹事会も認識しており、昨年度は、「気象予報士会の今後を考える委員会」を立ち上げて、討論を重ねてきました。私も一度だけこの委員会にオブザーバーとして出席しましたが、議論百出で、大変、疲れる委員会でした。中間答申をまとめられた委員の方々のご努力に深く感謝いたします。今回、その中間答申が行われます。それに関連して、総会の後に、この問題を討論する時間を設けました。忌憚のないご意見を出してください。

気象予報士から気象アナリストへ 最後に、予報士と社会との関わりについて、私見を述べたいと思います。気象予報士制度の発端は、天気予報の自由化であります。もう少し広い視野で予報士の社会的役割を考えますと、天気予報だけが、予報士の活躍の場ではないように思えます。最近の新聞記事でも取り上げられるようになりましたが、ビジネスの世界では、リスクマネジメントに対する認識が次第に普及する傾向を示しております。理論的には、「金融工学」の分野から出た発想であると思いますが、企業活動の安定化が利潤の増加にプラスになるという考え方です。多くの職種で、天候は企業活動を不安定化させる要因になっており、それをいかに安定化させるか、という問題が天候リスクマネジメントです。天候デリバティブはひとつの方法です。



気象学会は例えれば、鉱物のようなもの。対して気象予報士会は岩石のようなもの。岩石の構造は鉱物の構造より複雑なのです。

が、それ以外にも、天候リスクを安定化させる方法が、今後、開発されていくことが予想されます。このような問題は、気象の専門知識が必要であり、気象予報士が気象の分析に関わるのが望ましいはずで、将来、「気象アナリスト」ともいうべき専門職がいろいろな企業で活躍するのではないかと予想されます。

この問題に関連し、昨年度、気象庁は経済産業省と共同で、企業の天候リスクと中長期予報に関する研究会を行いました。その報告書が気象庁のホームページで公開されています。ぜひ、それに目を通して、いかに気象が企業活動と関連しているか、認識していただければ幸いです。このような社会的動向を予報士会がいち早くキャッチして会員に伝えることも予報士会の重要な使命です。気象予報士会は、気象予報士に対する情報発信源であり、予報士会に入会していないと、最新情報が得られないということを、未入会の予報士の方々にPRしたいと思います。

7年度への期待 さて、いよいよ7年目の活動に入るわけですが、会長・副会長を交代し、幹事も新しい体制で臨むことが提案される予定です。新会長のもとで、気象予報士会が、ますます発展することを祈念し、また、設立から6年間、本会の発展にご尽力いただいた会員の方々、特に、ボランティア精神で運営に当たられた幹事の方々に深く感謝して、ご挨拶の締めくくりといたします。



うん？ 何か良いことあった？



地方活動の紹介を熱心に聞き入る出席者



今回は四国お遍路さんの姿で登場しました。



6年間、ご苦労様でした。

「気象予報士会の今後を考える委員会」の委員募集

第7回定期総会で、本年度の活動として認められた「気象予報士会の今後を考える委員会」設置にあたり、検討委員の募集をいたします。

《検討内容》

今年度は、

「気象予報士の社会的地位向上、活動場所の確保を目指すための方策を検討するとともに気象予報士会のあり方を検討する。」ことを基本として、「気象予報士会の今後について（中間答申）」における

第3章 実現に向けての検討

第4章 実現のためのプログラム

を完成する。

《委員会実施要領》

委員会の開催：平成14年9月～平成15年2月末日

（開催時間については後日検討）

開催場所：千代田区中小企業センター会議室

事務局：幹事会に置く。幹事会では、組織担当幹事

（主担当田平、副担当白石）を中心として運営を行う。

* 各委員の委員会出席にかかる交通費は気象予報士会が負担する。

《委員の公募について》

今年度については「関東近隣からの委員を主体に」となっていますが、地方からの参加を妨げるものではありません。会員の皆様には、ぜひ、自らの問題として、積極的にご参加頂きたいと思っております。

公募締切：平成14年8月末日

応募方法：Fax、Tel、E-mail

応募先：〒107-0052 東京都港区赤坂7-6-52

ハイツ赤坂103

（株）第一プランニングセンター内

「気象予報士会事務センター」宛

Tel：03 - 3588 - 1887 Fax：03 - 3588 - 0973

E-mail：yohohead@mb.infoweb.ne.jp

大阪空港気象施設 見学会

龍見尚志（奈良）

関西気象予報士会の第9回定例会として、「航空と気象」をテーマに大阪空港施設内にある大阪航空測候所、ドップラーレーダー局舎、および全日本空輸（ANA）のステーションコントロール部の見学会が5月17日（金）に行われました。この日は関西在住の予報士会会員のみならず東京、神奈川、広島からの会員を加え、例会としては過去最高の39名の参加となりました。

13時30分から大阪航空測候所の湯本総務課長、奥井予報課長、堀之内観測課長より航空気象の予報業務と観測業務の内容をご説明いただき、現業室を見学した後、広い空港内を約15分かけてドップラーレーダー局舎に移動しました。この日はちょうど雨天で、私達が見学をする少し前には、空港周辺で弱い東よりの風が吹いていました。図は空港周辺半径20km、レーダー低仰角0.7°（高度約200m～300m）の観測エコーです。緑は近づく成分、黄は遠ざかる成分を表しており、2色の境界付近に空港が位置することから、雨域がまさに東から西へゆっくりと約1m/s～5m/sの速さで通り過ぎる状況が顕著に現れています。

この後、全日本空輸（ANA）のステーションコントロール部を見学させていただきました。ここには航空に利用する天気図のほかに、運航中の航空機の位置や残燃料などを表示するコントロールパネルが多数配置されていました。運航中の航空機が目的空港に着陸するまでの間、これらの情報をもとに地上と航空機の間で交信が行われ、安全を確保するのは言うまでもなく、同時に燃料消費の最も少ない最適コースで目的地に時間通り到着させるという重要な任務があることを説明していただきました。そのため飛行計画を立てる際は気象情報を入手し、当該飛行に

適するか否かを判断することが最も重要であり、全般的な気圧配置や出発空港・目的空港の気象実況・予報はもちろん、乱気流などの悪天情報、さらに航空路の風・気温・雲の状況にも細心の注意を払わなければならないなど、ミスの許されない業務の厳しさをお伺いいたしました。

今回見学させていただいたドップラーレーダーも降水強度や分布、気流の強さに加え、低層ウィンドシャーやマイクロバーストなどを観測することで空港周辺および航空機運航の安全に寄与しており、改めて民間航空各社と航空測候所の相互協力の関係を認識いたしました。最後になりましたが、緊張が走る雨天にもかかわらずこの見学会にご対応いただいた大阪航空測候所、全日本空輸の皆様には深く御礼申し上げます。

なお、関西気象予報士会ホームページでも見学記が紹介されています。
(<http://homepage2.nifty.com/yoho-kansai/>)



ドップラーレーダー局舎



ドーム内のレーダー

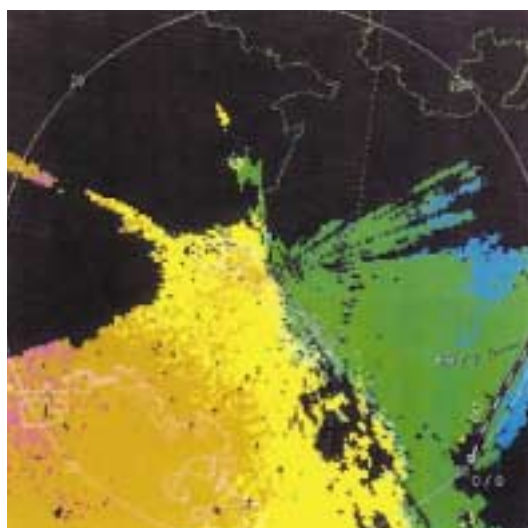


図 観測エコー

近づく成分（緑 5m/s 薄青1m/s）
遠のく成分（濃黄 5m/s 薄黄1m/s）

「施設見学会」のお知らせ

気象情報利活用の例として、下水道関連施設を見学いたしますのでご案内申し上げます。どうぞ、みなさん奮ってご参加下さい。

1. 見学場所・日程

【東京会場】8月30日（金）午後

・新河岸東処理場（東京都北区浮間）

【大阪会場】9月20日（金）午後

・大阪市下水道関連施設（大阪府大阪市内）

2. 定員 各会場30名を予定

3. 申込方法

必ず「往復葉書」にて、返信面に住所・氏名および

【東京会場】【大阪会場】の別を明記の上、右記事務センターまでお申し込み下さい。

・申込多数の場合は抽選となります。

・参加の可否については締切後御連絡いたします。

宛先 〒107-0052 東京都港区赤坂 7-6-52

ハイツ赤坂103

（株）第一プランニングセンター内

「気象予報士会事務センター」宛

4. 締切

【東京会場】8月16日（金）必着

【大阪会場】9月 6日（金）必着

移流霧の進入と消散

回答：永沢義嗣氏（気象庁）・質問：八木健太郎（神奈川）

東京支部天気図検討会は現在主に当日の実況解析と翌日の札幌、東京、福岡の天気予想を行います。4月21日の検討会では、翌22日千島列島中部にある高気圧が南西に張り出すため、ほぼ全ての人が22日の札幌の天気を晴と予想しました。実況では北海道太平洋沿岸で発生した霧が、南風により内陸に進入し、札幌の天気は終日曇が薄曇りとなりました。

移流霧の進入と消散について気象庁予報課の永沢義嗣さんに教えていただくことができました。

▶ 問い

北海道全域で南風が吹くような場合、太平洋側で発生した霧が石狩平野（札幌付近）に達することは珍しくないのでしょうか？ 4月22日がそのような状況に思えるのですが、21日の天気図検討会で翌日の札幌の予想も行い、おそらく誰も中しなかったのです。

▶ 永沢義嗣氏答え

ご質問の件ですが、太平洋から進入する霧が石狩平野（札幌付近）に達することはあります。ただし、霧（地上における水平視程1km未満）の状態では札幌付近まで到達することは珍しく、たいていは地表に近い部分が消散して層雲（St）となって到達します。その層雲も、日中はかなり消散し、夜になる

と優勢になるという日変化をします。

なお、頻度は小さいですが、日本海（石狩湾）から霧や層雲が石狩平野に侵入することもあります。春から夏にかけての北海道周辺の海上には、ほとんど常時霧や層雲が存在します。それが北海道の陸地のどこにどれくらい進入し、消散するかが、この季節の北海道の天気予報のポイントの1つです。

▶ 問い

海上の霧や低い雲がどのように進入し消散するか、そのポイントは何なのか...。風向は当然のこととして、風速、海上を吹走する風の気温、はたまた逆転層の存在どの様な要素が影響するのでしょうか？

▶ 永沢氏答え

このご質問は難しすぎて、明確に答えることができません。定性的には、海上で発生した霧が陸上に侵入した場合、下部境界条件（地表面温度など）が異なるために気層が変質し、大気中の水滴（霧粒）が蒸発して霧の濃度が変化する、という現象です。この季節（特に日中）は、海面水温より陸面地温の方が高いので、霧を含む気塊が海上から陸上へ侵入すると気温が上昇し、必然的に相対湿度が下がって霧粒が蒸発します。

しかしながら、実際には気温、海面

水温、陸面地温、風、日射、逆転層、地形、植生などが関与しながらこの現象が起きているわけで、詳細はわかりません。霧自体も、いったん霧ができると霧層の上面が放射冷却で冷えるので逆転層を明瞭化するなど、成層状態に影響を与えます。霧の上方に別の雲があると日射をさえぎるので、陸上へ侵入した霧が消えにくいという特徴もあります。夜間の陸上では、海上から進入する霧とその場で生成する放射霧との区別がつかないこともあります。

というわけで、この現象はあまりにも複雑すぎます。最近進歩している精密な数値モデルを用いて調べてみれば何かわかるかもしれませんが。

とはいえ、予報官は何らかの方法で予報しなければならないので、いろいろな手を使います。たとえば、もともとの気塊の性質が一樣と仮定すれば、霧が消える目安となる気温が決まってくるはずなので、気温の予想から霧が消える時刻や範囲を予想する方法があります。また、条件に大きな変化がなければ、前日の霧の消長の経過が当日の予報の参考になります。

などなど.....とにかく霧や層雲の予報は難しいです。数値予報もこの現象は苦手です。北海道では、St（層雲）の予報がうまくできれば天気予報の適中率がかなり改善する、と昔から言われてきました。

地・方・日・程

第5回栃木県気象予報士会例会

日時：9月1日（日）

場所：小山市中央公民館

内容：(1)環境と気象

（宇都宮大学工学部教授 長谷部正彦先生）

(2)茨城インターハイ報告（大門禎広）

(3)この夏の気象（柳原正賢）

内容はいずれも予定

連絡：大門禎広（E-mail:daimon@y.email.ne.jp）

関西気象予報士会 勉強会

日時：10月12日（土）13:00～17:00

場所：大阪市立阿倍野市民学習センター 第二研修室

地下鉄谷町線「阿倍野」駅 7番出口すぐ

あべのペルタ3階

Tel:06-6634-7951

内容：数値予報について（仮題）

（大阪管区気象台台長 足立崇氏）

参加費：500円程度

終了後懇親会も予定しています。（3,500円程度）

連絡先：平松信昭（E-mail:hiramatu@jwa.or.jp）

Tel:090-2389-1388

藤林敏史

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-3-2-16F

(財)日本気象協会 関西支社 気象情報部 気象情報課

Fax:06-6266-6000

第13回四国支部気象予報士会例会

プレイベント（愛媛県自主研究グループとの合同企画）

日時：9月1日（日）9:00～13:00

場所：愛媛県宇和町総合運動公園

内容：愛媛県総合防災訓練見学

本例会

日時：9月8日（日）13:30～17:00

場所：愛媛県松山市

内容：(1)松山豪雨解析（一 広志）

(2)天気図談話会

(3)四国支部事務局長選挙、他

内容、話題提供者はいずれも予定

本例会だけでもご参加ください。

連絡：濱田和雄（E-mail:RXR17772@nifty.com）

— 広志（E-mail:kitutuki@jasmine.ocn.ne.jp）

新 役 員 抱 負

【石井和子会長】

素晴らしい初代会長のあとを受けて、二代目会長をただ一生懸命に勤めさせていただくつもりであります。

思えば気象予報士会立ち上げの準備から参加させていただき、1996年の設立当初750人だった会員が現在は1,750人と、実に倍以上にもなりました。

発足当時、木村前会長（現在・顧問）が、気象予報士会を出来はじめの熱帯低気圧にたとえられ、それが台風に成長したとしても、長時間強い渦を巻き続けるには、台風が自分の内部に渦を持続させるだけのしっかりとした構造を持ち続けに加えてCISK（第二種条件付不安定）が必要であるとおっしゃったことを思い出します。

今年で7年目を迎えた予報士会ですが大世帯となって可能性の広がった分、さまざまな問題点もでてきています。そんな中で新たにCISKを起こしながら予報士会としてしっかりとした渦を持続させて行くことができるかどうかは、これはひとえに会員の皆さん一人一人の、会に対する自発的な意識にかかっているといっても言い過ぎではないでしょう。予定の時間を大幅にオーバーした総会での熱のこもった会員の皆さんの討論を聞いているうちに、持続させるべき渦としての予報士会はこれからで、エネルギーもまだ大丈夫だとの感を強く持ちました。

今年から幹事も4人を除きすべて交代いたしました。新たな予報士会としてのステージは、内外ともにもう少し行動的で、社会的にも何かの形で役立つことが出来ればと思います。嬉しいことに関東でも、このところ小学生への授業を受け持とうとアタックする人が出始めています。まずは、会員それぞれが自分に出来る身近なアイデアを出すところから始まり、それを実行に移していただくことを提案したいと思います。それが、これからの楽しく充実した、魅力的な予報士会となる一番の近道に思われてなりません。

【藤堂憲幸副会長】

役員候補としてお話をいただきました時点で事業計画や予算案ならびに会則等の改訂・設定案を拝見しましたところ、私の考え方との乖離が大きかったので、総会において個人的見解を述べさせていただき、結果として自分の考えに従って、今期の活動に係わる案総てに反対票を投じましたが、その私を含んだ役員案までもが可決されてしまいました。それではと、事業計画と予算とを修正運用を行い、会員の皆様に見える具体的な活動を行うことにより、事業等の改革を試みたかったのですが、現実の様々な壁に直面しています。幹事任期が1年となった中で、前期作成の事業計画・予算案を基にして、今期役員の色を出すのは容易ではありませんが、少なくとも副会長の責務は滞りなく果たし、会活動の活性化と会費の適正化を求めて、微力ながら会員の皆様のお役にたてるよう努力する所存であります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【岡村和賛幹事】

地方活動のより一層の充実、情報伝達のIT化の促進、この二大テーマを自分の年間活動目標と位置づけ、力不足とは思いますが、精一杯頑張っていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

【白石晶二幹事】

昨年度は縁あって「気象予報士会の今後を考える会」のメンバーを務めさせて頂き、考えるところが多々ありました。そのうちの一つに当会の渉外機能が弱いということが指摘され、これを充実させていきたいと思っています。また、「組織」は、会の活動の基本を策定する立場にありますので、田平幹事と力を合わせて頑張りたいと思います。

【田平耕治幹事】

今年度、皆様のお役に立てばと思っています。一番大きな課題は「予報士にはなったけれど...」でしょう。問題点の1つは就職ですが、気象情報を使っている職場は多いです。ただ、「気象予報士のスキル」という問題点の2つ目があります。

「気象予報士会の今後を考える委員会」において、に幾つかの実行できる具体的な事業を決定したいと思います。私の個人的な考えですが、現在の形態、予算では活動は現状維持が精一杯だと思います。受益者負担の原則でどこまでできるのか？ 会員の皆様も自分が計画するつもりで、積極的なご意見をお願いします。

【平松信昭幹事】

財団法人日本気象協会に勤務しております。この4月から大阪から東京に転勤してまいりました。東京で生活するのは初めてで、様々な面で関西と文化の違いを感じております。

気象予報士会の幹事をお引き受けしたわけですから、一人でも多くの会員の皆様が満足していただけるように、会の活動を盛り上げていきたいと願っております。

また、関西気象予報士会の幹事をしてきましたが、全国に会員が散在している現状を考えると、多くの会員が参加しやすい地域単位の活動拠点が必要不可欠だと思っております。そして、様々な活動を通して社会に貢献すれば、自然と気象予報士会が世間に認知されるようになるのではないかと考えております。

どうぞ、今後ともよろしくお願い申し上げます。

【川端康夫会計監事】

議論が白熱した今年の総会の雰囲気でお分かりのように、気象予報士会は今まさに岐路にたっております。

荒波に向かってどのように進んでいくのか、これを見極めて仕向けていくのが私の任務ではないかなと思っています。みなさまのサポートをお願いいたします。

■ 第7期幹事役割分担 ■

担 当	主担当	副担当	担 当 分 野
総 務	平松	小川(栄)	総務、総会、企画、幹事会司会など全般
会 報	小川(豪)	上妻	会報、ニュースレター
情 報	上妻	原	ML運営など情報システム
ホームページ	原	岡村	ホームページ運営
地 方	岡村	小川(豪)	支部のあり方など検討
会 計	小川(栄)	平松	会計
渉 外	白石	田平	対外的折衝
組 織	田平	白石	今後の気象予報士会を検討（含む会則）

編集後記

7月末現在年会費未納の方に「郵便振替払込取扱票」を同封しました。気象予報士会は会員の皆様の年会費のみで運営しております。健全な会運営のため、皆様のご理解・ご協力をお願いいたします。ご疑義がある方は事務センターまでお問い合わせ下さい。この度、会報担当幹事となりました小川豪です。早いもので私の幹事役も5年目に入りました。しかしながら、会報編集担当は初めての体験となります。新たな思いでよりよい会報を発行していきたいと思っております。

会報「てんきすと」では、引き続き会員の皆様からのご投稿、ご意見をお待ちしております。（編集子）

気象予報士会 E-mail: yohohead@mb.infoweb.ne.jp

ホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/yoho/>